

平成 2 6 年度病虫害発生予報第 7 号

平成 2 6 年 8 月 2 0 日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(穂いもち)	-	多い
		紋枯病	-	平年並
		トビイロウンカ	-	やや少ない
		斑点米カメムシ類	-	多い
	ダイズ	紫斑病	平年並	平年並
果樹	ナシ	ハスモンヨトウ	-	平年並
		カメムシ類	-	やや多い
	共通	シンクイムシ類	平年並	平年並~やや多い
野菜	キャベツ、ブロッコリー、イチゴ、ネギ、ナガイモ	ハスモンヨトウ	平年並	平年並
		シロイチモジヨトウ	平年並	平年並

気象予報(抜粋)

1 か月予報(8月16日~9月15日:8月14日、広島地方気象台発表)

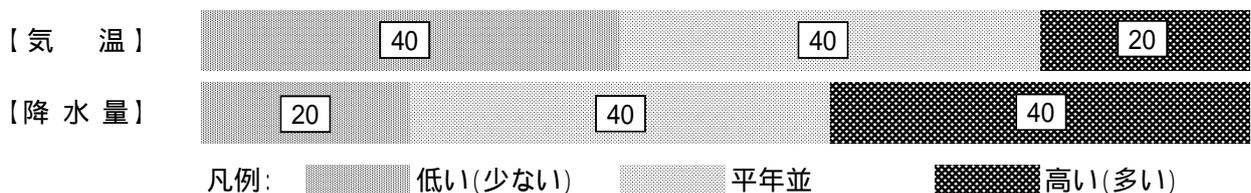
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

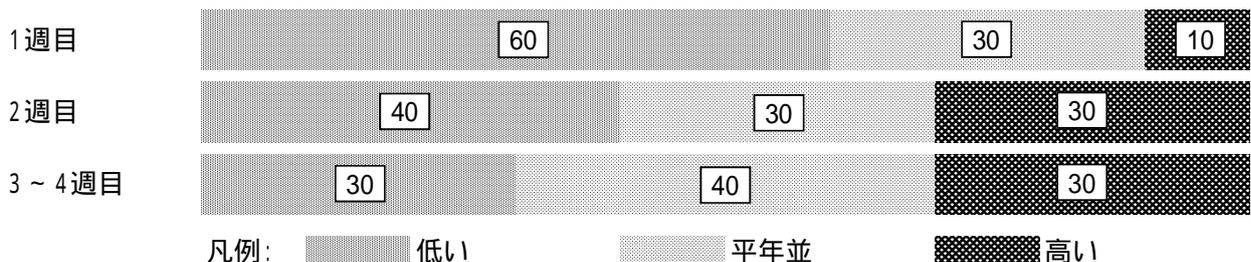
向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率60%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イネ]

1 いもち病(穂いもち)(平成26年8月20日付、病害虫発生予察警報第1号発表)

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の調査では、穂いもちの伝染源となる葉いもちの発生ほ場率が40%であったが、8月18日現在の発生ほ場率は53%に増加している。

イ 8月18日現在、これから出穂期を迎える「きぬむすめ」等の中生品種栽培ほ場では、感染能力を保ったいもち病斑が広域で確認されている。

ウ 8月上旬より現在まで曇雨天が続いており、「コシヒカリ」および「ひとめぼれ」等早生品種の穂ばらみ期～穂揃い期が、いもち病の感染に好適な条件で経過している。さらに、8月19日発表の中国地方週間天気予報では、今後1週間、いもち病の感染に好適な気象条件で経過すると予想されている。

エ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」など、いもち病に弱い品種の栽培面積が90%以上をしめている。また、日照不足の影響により、イネの生育は軟弱気味で経過しており、いもち病に罹病しやすい体質となっている。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察警報第1号を参照。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月1日現在、県予察ほ場(鳥取市橋本)における発生は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病勢進展が衰えず、出穂後の防除が必要な場合には、病害虫防除指針などを参考にして追加防除を行う。

3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域 平坦部(特に沿岸部)

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、予察灯への誘殺は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本種の発生は、ほ場間差が大きいいため、各ほ場における生息密度に注意する。特に、ウンカ類常発地において、育苗箱施薬及び出穂前後の防除を行っていない中生品種栽培ほ場及び遅植えのほ場では、注意が必要である。

イ 防除適期は、幼虫発生最盛期の9月第2～3半旬頃と予想される。この時期の要防除水準(成幼虫数10頭/株)を超えたほ場では、病害虫防除指針などを参考にして粉剤などで直ちに防除を行う。なお、散布の際、本種の生息場所である株元に薬剤がかかるように注意する。防除に当たっては、農薬使用基準

を厳守する。

4 斑点米カメムシ類（平成26年7月31日付、病害虫発生予察注意報第4号発表）

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 多い

（2）予報の根拠

ア 8月中旬現在、現地ほ場における発生ほ場率は79.4%（平年：55.3%）、50回振りすくい取り虫数は8.8頭（平年：5.4頭）で、平年に比べて多い。

（3）防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第4号を参照。

〔ダイズ〕

1 紫斑病

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 大豆の開花期は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 防除に水和剤を用いる場合は、開花期後25～35日に1回、アミスター20フロアブル2,000倍液（100L/10a）又は同剤3,000倍液（150～300L/10a）を散布する。なお、薬液には展着剤を加用する。

イ 防除に粉剤を用いる場合は、マネーグトレボン粉剤DLを開花期後25～30日に1回散布する。

ウ 紫斑病とカメムシ類を同時防除する場合は、カメムシ類の項を参照する。

2 ハスモンヨトウ

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 8月第3半旬現在、フェロモントラップによる誘殺数は平年並～やや多い。

イ これまでの発生状況及び、向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努め、発生初期の場合、葉の切除などによる捕殺を行うか、病害虫防除指針などを参考にして粉剤、水和剤のスポット散布を行う。

イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数3～5か所以上とする。なお、新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、観察にあたっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内での観察も行う。

ウ 若齢幼虫に対する登録農薬の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が低下するため、防除適期を逸しないようにする。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月上旬現在、予察灯におけるイチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの総誘殺数はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 紫斑病に水和剤を使う場合

(ア) カメムシ防除にネオニコチノイド系又はフェニルピラゾール系殺虫剤を使用する場合

- ・開花期後30～35日(全体の花が終わった時期)の1回防除を基本とし、紫斑病防除薬剤(アミスター20フロアブルの2,000倍)とカメムシ防除剤(ダントツ水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、又はキラップフロアブル2,000倍)の混用で100㍈/10aの薬液を散布する。なお、展着剤を必ず加用する。

- ・カメムシ類の発生が多い場合は、前回散布の10日後に、カメムシ防除剤(水和剤あるいは粉剤)を散布する。

(イ) カメムシ防除に上記以外の殺虫剤を使用する場合は、2回防除を基本とする。

- ・1回目:開花期後25～30日(全体の花が終わった時期)

紫斑病防除薬剤(アミスター20フロアブルの3,000倍)とカメムシ防除剤(エルサン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤等)の混用で、150～300㍈/10aの薬液を散布する。なお、展着剤を必ず加用する。

- ・2回目:1回目防除の10日後

カメムシ防除剤(水和剤あるいは粉剤)を散布する。

イ 紫斑病に粉剤を使う場合

- ・1回目:開花期後25～30日後

マネージトレボン粉剤DL

- ・2回目:1回目防除の10日後

トレボン粉剤DL、MR.ジョーカー粉剤DL等のカメムシ防除剤を散布する。

果 樹

[ナ シ]

1 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並～やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月上旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数は、平年並～やや多い。

イ 一部の園では、収穫果実にはシンクイムシ類の果実被害がみられている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第3世代成虫（第4回成虫）の発生時期は、平年並の8月中旬～9月中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ナシヒメシンクイの発生盛期となる8月下旬～9月中旬の防除を徹底する。

イ 薬剤はアグロスリン水和剤2,000倍液、テルスターフロアブル3,000倍液、サムコルフロアブル10の5,000倍液、フェニックスフロアブル4,000倍液などを散布する。なお、薬剤の散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守する。

[共通(ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ、モモ)]

1 カメムシ類(平成26年7月9日付、病害虫発生予察注意報第2号発表)

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月上旬現在、予察灯等におけるカメムシ類の誘殺数はやや多く、特にクサギカメムシの誘殺数が増加している。

イ 県予察ほ場(北栄町、殺虫剤無散布、ナシ園)では、7月下旬～8月上旬にかけて、カメムシ類の被害果が急増した。

ウ 向こう1か月の気象予報は、カメムシ類の加害活動にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ほ場をよく観察し、カメムシ類の発生がみられる場合は、追加防除を行う。薬剤は平成26年度病害虫発生予察注意報第2号(平成26年7月9日発表)を参考にする。

野菜

[キャベツ、ブロッコリー、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場(北栄町)及び現地ブロッコリーほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の防除効果が高い若齢幼虫期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、被害がみられた場合には直ちに防除を行う。

イ キャベツでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、ノーモルト乳剤2,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合にはトルネードエースDF2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーでは、アニキ乳剤2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

エ イチゴでは、アタブロン乳剤 2,000 倍液、マッチ乳剤 3,000 倍液、フェニックス顆粒水和剤 2,000 倍液、トルネードエース DF 2,000 倍液などを散布する。

【ネギ、ナガイモ】

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（北栄町）及び現地ネギほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 県予察ほ場において、幼虫による食害量の発生は平年並である。

ウ 現地ナガイモほ場において、幼虫による食害の発生量は平年並である。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 幼虫が若齢の時期に防除を行う。この時期を逃すと防除が困難となる。

イ ネギでは、プレオフロアブル 1,000 倍液、トルネードエース DF 1,000 倍液、スピノエース顆粒水和剤 5,000 倍液などを散布する。

ウ ナガイモでは、デルフィン顆粒水和剤 1,000 倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果(ナシのシンクイムシ類)などの参考情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

< お問い合わせ >

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260
鳥取県病害虫防除所
(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)
もしくは
鳥取県農業試験場環境研究室
(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係
〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048
鳥取県農林総合研究所園芸試験場環境研究室
(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

予報第8号の発表は、9月3日(水)の予定です。